

## 組織評価の改善状況報告書

平成 28 年 3 月 31 日

評価会議議長 殿

工 学 部 長

組織評価に関する実施要項第10に基づき、組織評価（自己評価及び外部評価）結果に係る要改善事項について、次のとおり平成27年度の改善状況を報告します。

|  |
|--|
| 要改善事項  |
| 基準 2 平成 2 5 年度から改組が計画されているが、社会のニーズにこたえられる工学部/工学研究科になることが期待されている。   |
| 要改善事項に対する改善計画（実施時期を含む）   |
| 平成 2 5 年 4 月から改組がスタートする。この改組を成功させるために、工学部長補佐室に評価・改組企画室を設置した。この企画室を中心に、各学科・専攻の教育・研究において成果を上げるために何を重点的にすべきかを検討し、年次進行で実行する。   |
| 改善状況   |
| 改組に関する教職員に向けたアンケートを実施・分析し、専攻、職階ごとの分析を行い、全教員に公表した。得られた改組に関する不満や意見を全教員で共有することで、今後の改善に向けた意識向上を図ることができた。特に、改組のメリットやデメリット、新入生の印象、教育・研究・運営・施設の問題点などについての分析から明らかになった点に基づいて、今後の改善案を検討した。さらに今後の学科/専攻科における教育研究活動の推進に繋がるよう、評価・改組企画室をはじめ工学部長補佐室等で継続的な審議を行っている。 |
| 高校訪問や共同研究などを通じ、高校、企業からの意見を集め、今後の大学院改組や入試方法等を含めた学部・大学院のあり方について検討を継続している。  |
| 他大学の状況について情報を収集し、静岡大学に適した事例を参考にして、大学院改組案の策定に継続的に取り組んでいる。   |
| 達成年度（予定を含む）  |
| 平成 2 9 年度  |

|                        |
|------------------------|
| 要改善事項                  |
| 基準 3 女性教員・外国人教員の割合が低い。 |

|  |
|--|
| 要改善事項に対する改善計画（実施時期を含む）   |
| 女性教員の優先採用制度の活用等を検討しながら、女性教員の比率を高める努力を進めていきたい。また「学生の英語能力向上、留学制度の充実、グローバル人材育成教育の実施」などを、工学部/工学研究科の国際化のための重要な課題と考えている。これらを実行するためには、工学部/工学研究科の各学科・専攻において外国人教員を1名ずつ(合計5名)を雇うことが必須と考えており、できるだけ早い時期に採用する(教授会で承認された)。           |
| 改善状況   |
| 平成26年より、工学研究科5専攻で、外国人教員を1名ずつ(合計5名)順次採用しており、27年度までに計画どおりに採用できた。この外国人教員には平成27年度予定の留学生用「Asia Bridge Program」の英語授業の担当、日本人教員の英語授業立ち上げの支援に取り組んでいただいた。女性教員を優先的に採用することを検討している。さらに外国人教員と留学生担当教員の支援を行う特任准教授を採用する際、女性教員を優先的に採用した。 |
| 達成年度(予定を含む)  |
| 平成27年度   |

|   |
|---|
| 要改善事項   |
| 基準5 英語力の向上について、主体的な改善の取り組みが十分でない。   |
| 要改善事項に対する改善計画（実施時期を含む）  |
| 国際化の推進とグローバル教育を目的に、「ターゲット・アジア人材育成コース(学士課程と修士課程)」(仮名)の設立が検討されている。その修士課程では、英語対応の授業だけで卒業できる英語教育コースが設立される予定である。工学部/工学研究科では、国際化推進のため、また、上記プロジェクトの準備として、「各学科・専攻に1名の外国人教員の採用(合計5名)」と、「学部で行っているNIFEEプログラムの大学院修士課程への拡張」を検討している。日本人学生も副専攻で英語教育コースを受講可能とする。またSSSVプログラムを有効利用し、工学部/工学研究科の学生の卒論や修論の英語発表の機会を増やす。放課後英語教室への受講を増やすための宣伝活動も行う。今年度のSSSVプログラムの参加研究室は16(応募研究室10に対して)と増えており、各研究室5名で合計80名の学生が外国人学生と一緒に英語での研究発表を行う予定である。今年度からSSSVプログラム参加学生に単位を認定する制度も確立した。学生の積極性を喚起し、英語能力に自信を持たせることが重要である。 |
| 改善状況  |
| 国際化の推進とグローバル教育を目的に、「アジアブリッジプログラム(ABP)」の実施が文部科学省に認められ、学士課程と修士課程の学生募集が行われ、多数の応募があり選考を実施し、第1期生の入学者を受け入れ、グローバル教育に取り組んでいる。工学部及び工学研究科では、国際化の推進と上記プロジェクトの一環として、「各学科・専攻に1名の外国人教員の採用(合計5名)」の計画を推進し27年度までに計画通り採用し、英語教育を充実させている。さらに、ABPプロジェクトや上記の採用される外国人教員の支援のための特任准教授1名を採用して、外国人教員がより実効的に活動できる環境を整えると共に工学部のグロー   |

バル化の為の改革を推進した。また、上記プロジェクトの予算を活用して、一般の日本人学生の能力に応じた英語力の自主的な訓練を効率化し、同時に学生のTOEICの点数を向上させることを狙ってALC社のe-ラーニングシステムの導入とそれを活用する工学部の学生向けの授業を平成27年度から実施した。また、4月には「英語学習セミナー」、7月に「TOEICスコアアップセミナー」を実施した。大学内で英語の学習ができる「放課後英語教室」も実施を続けている。

外国の大学の研究室と学生が交流を行うSSSVプログラムも順調に実施され、平成27年度には工学研究科の14研究室(研究グループ)が参加し、72名の学生が海外へ渡航し、アジアを中心とする諸大学を訪問、セミナー開催など両校の学生間で交流の機会を持った。また海外の大学より21名の学生を招き、セミナー開催など工学部にて交流の機会をもった。参加学生からは英語の重要性を再認識したこと、海外の学生と交流することにより広がる視野の興味深さについて指摘があり、学生がグローバルな視野を育むよい機会を持つことができた。1月に実施された成果報告会では参加学生からは交流の成果や英語の重要性についての報告がなされ、その内容は静大TVによって撮影されて、YouTubeを通じて公開された。

達成年度(予定を含む)

平成27年度

#### 要改善事項

基準6 30%以上の留年生を防ぐ対策が必要である。特に2留以上を防ぐ対策が必要である。

#### 要改善事項に対する改善計画(実施時期を含む)

工学部長補佐室の教育企画室で留年生対策を検討している。授業を連続して多数回欠席した学生には指導教員が注意し、留年の可能性のある学生には、早い段階で学生と指導教員が話し合う体制を作る。また学習目論見書を作成し、早い段階で単位の取得状況から留年の可能性を自分でチェックできるシステムを導入する。更に平成25年度のテクノフェスタ時に行われる父兄懇談会に学生と保護者に参加して頂き、指導教員と面談して学生の勉学や進路について話し合う予定である。

#### 改善状況

教育企画室と教務委員会で留年生対策を検討・実行している。成績不振学生の調査を毎学期行い、成績不振学生に必ず連絡をとって状況を確認している。更にその状況に応じて指導教員がどのような対応をすべきかの学生指導のフローチャートを作成した。又、成績不振学生の保護者に対し、卒業の見込みのある学生に対しては「履修の勧奨」の手紙を、卒業の見込みのない学生に対しては「退学勧奨」の手紙を送っている。テクノフェスタ時に行われる父兄懇談会では成績不振学生の保護者に来て貰い面談を行っている。さらに、退職教員による演習や補習授業の実施の検討も開始した。それらの結果、25年度の留年率は27.8%、26年度は30.5%、27年度は26.1%となり、徐々に成果が出ている。今後とも取り組みを続けていくことが必要である。

達成年度(予定を含む)

平成29年度

|  |
|--|
| 要改善事項  |
| <p>基準 8 学生アンケートに対して、教員がいかに改善したかの検証ができているのか？<br/>         大学生活・学習に関するアンケート結果で満足度の低い項目（教育，学習支援，生活支援，<br/>         進路支援，教員との相談体制）への対応が必要である。</p>  |
| 要改善事項に対する改善計画（実施時期を含む）   |
| <p>FD活動で実施している各授業への学生アンケートに対して、大部分の教員がそのアンケート<br/>         に応えて授業の改善策を回答し実施している。一方、参加していない教員にもFD活動への参<br/>         加を働きかける。また各教員の改善策がどのように実行され、成果が出ているかを検証する<br/>         方法を検討する。大学生活・学習に関するアンケート結果については、工学部長補佐室に新<br/>         しく設置した評価・改組企画室で分析し、対策を検討する。</p>   |
| 改善状況   |
| <p>アンケートを実施可能な全ての学部授業で受講学生による授業アンケートを実施している。<br/>         さらに、アンケートの集計結果やアンケートに記載された学生からのコメントに対し、授業<br/>         担当教員がコメントや回答を行うシステムが実行されている。</p> <p>また、大学院生チューターによる、全ての授業科目に関する相談や、大学生活の相談窓口と<br/>         して、「チューターズフロント」を静岡キャンパス、浜松キャンパスに設置した。また、工<br/>         学部において、大学院生チューターによる留学生を対象とした、課外日本語教室および生活<br/>         相談の窓口を設置した。さらに、留学生の居住地である国際交流会館およびあけぼの寮のそ<br/>         れぞれに、留学生チューターによる生活支援窓口を設置した</p> |
| 達成年度（予定を含む）  |
| 平成27年度   |

|   |
|---|
| 要改善事項   |
| <p>基準 9 管理運営体制の更なる充実が必要である。</p>   |
| 要改善事項に対する改善計画（実施時期を含む）  |
| <p>大学が変革期にあり、工学部/工学研究科の改組で4学科5専攻が5学科6専攻に増えて、管<br/>         理運営に関する業務がかなり増えている。今まで組織の整備を行い、管理運営体制の強化を<br/>         図ってきた。平成25年度からは、工学部長補佐室に評価・改組企画室を新しく設置し、教<br/>         育・研究・社会貢献活動の更なる充実と効率化を目指す。</p> |
| 改善状況  |
| <p>上記改組に伴い評価・改組企画室を設置した。具体的作業として、改組1年および2年経過<br/>         時期に、教職員・学生にアンケート調査を行った。現在、分析・点検を行い、次年度以降の<br/>         改善につなげる検討を続けている。</p>   |
| 達成年度（予定を含む）   |
| 平成28年度  |

|   |
|---|
| 要改善事項   |
| 基準 1 2 共同研究のアンケート結果において、大学の評価と企業の評価に乖離が見られる項目が数項目あるので、原因の分析と対応が必要である。企業との共同研究の実施件数は年々低下しており、減少に歯止めをかけるための戦略や工夫が必要である。   |
| 要改善事項に対する改善計画（実施時期を含む）  |
| 工学部長補佐室の研究企画室において、共同研究に対する大学の評価と企業の評価の乖離について原因を分析する。また地元企業との共同研究が減少傾向にあるので、その原因の調査と対策の検討を行う。  |
| 改善状況  |
| 教員と企業の間を取り持ち、教員にとって企業との共同研究実施に際して何でも容易に相談できる人材が必要であり、イノベーション社会連携推進機構など関係各署に働きかける。イノベーション社会連携推進機構長および共同研究の担当者と工学部長補佐室会議において意見交換の場を設けて現状の確認と今後の対策に関して議論した。また共同研究件数を増加させる対策について今後も継続してイノベーション社会連携推進機構長と工学部長補佐室会議にて議論・検討を重ねて改善に取り組むこととした。 |
| 達成年度（予定を含む）   |
| 平成 2 8 年度   |

|  |
|--|
| 要改善事項  |
| 基準 1 3 英語能力や国際的視野が十分身につけていると考えている学生の割合が低い。   |
| 要改善事項に対する改善計画（実施時期を含む）   |
| SSSVプログラムを有効に利用し、国際会議での英語による発表や外国の異文化を体験する学生を増やす。今年度のSSSVプログラムの参加研究室は16（応募研究室10に対して）と増えており、各研究室5名で合計80名の学生が外国人学生と一緒に英語による研究発表を行う予定である。更に今年度からSSSVプログラム参加学生に単位を認定する制度も確立した。学生に英語能力に対する自信と積極性を持たせることが重要と考えている。また「外国人教員の採用」と「修士課程の英語教育コースの立ち上げ」の検討を早急に行う。         |
| 改善状況   |
| 平成 2 3 年度に開始したSSSVプログラムも今年で5年目となり、今年は14研究室（学生は1研究室当たり約5名参加）合計72名が参加した。2週間ほど外国の大学の研究室の教員・学生と一緒に過ごし、研究発表や外国の大学の学生との交流などを行った。逆に外国の大学の外国人学生を静岡大学に招く制度も実施して、5研究室21名の学生を受け入れた。1月には、SSSVプログラムに参加した工学研究科の全教員・全学生が参加できる成果発表会を行い、その様子は静大テレビにより撮影されて、YouTubeで全世界に公開されている。 |
| 各学科で採用した5名の外国人教員による英語の授業も開始された。  |
| ABPの一期生も平成27年度から入学し、日本人学生との同じクラスでの授業が出来るように準備を進めている。その結果、日本人学生と外国人学生の交流の場も増えることが期待される。   |

TOEICの点数が低いことが学生の英語についての自信がない要因の一つとなっているので、TOEIC点数アップの為にeラーニングシステムNetAcademy2を活用し、それを利用する授業を平成27年度から各学科で実施しており、ある程度TOEICのスコアアップとしてその効果も表れている。

大学院の入学試験の英語の成績をTOEICのスコアにした結果、入学試験受験者のTOEIC受験者が増えて、それらの学生のTOEICのスコアアップもなされた。

達成年度（予定を含む）

平成27年度

要改善時効

総合評価 大学院教育の充実など、まだ十分とはいえない点も見える。浜松と静岡の2箇所のキャンパス間、特に理工連携への取り組みが必要ではないか。

要改善事項に対する改善計画（実施時期を含む）

静岡大学では、理・工・農・情の理工系の4つの研究科修士課程を大きくくり化し、大学院の研究科横断の教育プログラムの拡大、従来の研究科を越えた副専攻の科目の履修が可能になる予定である。また「教員組織と教育組織の分離」を行い、社会の変化に迅速に対応する教育・研究体制を目指す。（共に平成27年度スタート予定）

改善状況

平成27年度には、理工系4研究科（静岡キャンパスの理・農と浜松キャンパスの情・工）が1研究科に纏められ、40名の留学生と40名の日本人学生（大学院修士課程）による「Asia Bridge Program」が始まった。浜松・静岡の連携した教育・研究がスタートし、全世界から多くの優秀な学生を受け入れる体制が整ってきた。

達成年度（予定を含む）

平成27年度